女子大國文　第百三十六号　平成十六年十二月三十日

土神と狐の物語

――那珂（中　勘助）『提婆達多』からの影響――

工藤哲夫

（以下の注の記号・番号の内、アルファベットは内容に関する補注、アラビア数字は出典・文献注を表す。）

一　那珂（中　勘助）『提婆達多』

賢治が家出滞京中の大正十年五月、那珂（中　勘助）『提婆達多』[1]が刊行された。提婆達多とは、法華経に提婆達多品があり、「賢治が本尊とした十界曼荼羅」[2]中にもその名が見える。日蓮の示すところによれば、

［前略］提婆達多と申は阿難尊者には兄斛飯王（こくぼんわう）には嫡子師子頰王には孫佛にはいとこ（従弟）にて有しが。佛は一閻浮提第一の道心者にてましまし丶に怨（あだ）をなして。我は又閻浮提第一の邪見放逸の者とならんと誓て。萬の惡人を語（かたらひ）て佛に怨をなして三逆罪を作て現身に大地破て無間大城に墮て候し［後略］[3]

（「主師親御書」）

という人物であり、又、

［前略］世尊提婆達多を汝愚人人の唾を食っと罵詈せさせ給しかは。毒箭の胸に入かことくをもひてうらみて云。瞿曇は佛陀にはあらす我は斛飯王の嫡子阿難尊者が兄瞿曇が一類なり。いかにわしき事ありとも内内教訓すべし。此等程の人天大會に此ゝ程の大禍を現に向て申すもの大人佛陀の中にあるべしや。されば先先は妻のかたき今は一座のかたき。今日よりは生生世世に大怨敵となるべしと誓ゝしゞかし。［後略］(4)

（「開目鈔上」）

ということである。右の「妻のかたき」の意味を『本化聖典大辭林』に徴すならば、

「開目鈔」等に出づ。提婆達多曩に釋尊の妃となりし耶輸多羅女を娶らんと競爭して失敗に歸せしをいふ。「本行集經」(十三)捔術爭婚品に『悉達太子已に成人せしかは、父王良妃を娶らんとし、大臣摩訶那摩の女耶輸陀羅才色双美にして太子の意に如へるを知り、國師波羅門を介して那摩の家に至り婚を求めしむ。那摩容易く諾せず。一切の技能殊勝の者に與へんと答ふ。此に於て淨飯王乃ち諸の釋種の童子に勅して、日を刻し域外の廣野に於て技を捔せしむ。那摩大臣女を盛裝せしめて臨場し、上下悉く參觀す。角技は、書と、算數と、武技と、音聲、歌舞、相嘲、漫話、戲謔、言談染色、造珠、繪畫、香合、博奕、樗蒲、圍碁、雙六、握槊、投壺、擲絶、跳坑、相撲等を試む就中相撲に於て達多童子は太子を敗らんと自高し、反て太子の爲に捻伏せられ、妬心滿々遂に城門前に於て一大象を撲殺す。太子之を見て通行の妨げなりとし、更に捉て之を他方に擲ち地中に掐沒せしむ。捔技の結果は悉多太子第一、阿難陀第二、提婆達多第三となる。太子已に斯く優勝の技能を發揮せしかは摩訶那摩大臣は先非を懺悔して女耶輸陀羅を上る。乃ち吉辰をトし立てゝ妃と爲す。人天みな之を祝頌す。偈に曰く、

耶輸陀羅大臣ノ女、名聞國ヲ蓋フテ遠近ニ知ラル、吉日ヲ占トシ取テ妃ト爲ス、迎將シ來リ宮殿ノ内ニ入ル、太子其ト共ニ欲樂ヲ受ク、歡娛縱逸厭クヲ知ラズ、猶天主憍尸迦ノ、彼ノ舍脂夫人ト戲ルガゴトシ（文）

これ提婆達多が釋尊を妻の敵と怨める因緣なりとせり。［後略］(7)(8)

とある。賢治は那珂『提婆達多』を読んだのではなかろうか。（滞京中に読んだとすれば、それは帝国図書館に於てだったかも知

賢治が関心を寄せて当然の人物と言えよう。

れない。[8] 或いは自分で購入して。）そしてそこからヒントを得て、「土神ときつね」を書いたのではなかろうか。[b] 両作品には、三角関係（と一応言っておく）の設定以外、文脈を異にしつつも、次のような表現・内容上の類似点又は関連すると思われる点を見出すことができるのである。（以下引用文に於て、☆は『提婆達多』より、★は「土神ときつね」よりの引用を表す〔比較対照の必要ある場合〕。）

☆〔前略〕提婆達多王子、それは三千の佳麗の耳朶に、嬉しく、甘く、懐しく、快い響をつたへる名であつた。彼は獅子のごとく雄々しい容貌と肉體をもつてゐた。加之彼の性格、所行とは似てもつかぬ、最初の一瞥をもつて全き信頼と愛慕（ママ）を獲得するに足るところの天成の氣品をそなへてゐた。そしてひとたび彼が相手の歡心を得ようとして笑顔をつくる時にかの獅子は忽然として愛すべき鳩となり、その巧妙な態度と話ぶりとはあらゆる彼の容貌の缺點――彼とてももとより缺點はあつた――を蔽ひかくすに十分であつた。[11]〔後略〕

★ 樺の木はどちらかと云へば狐の方がすきでした。なぜなら土神の方は神といふ名こそついてはゐましたがごく乱暴で髪もぼろぼろの木綿糸の〔束〕のやう眼も赤くきものだってまるでわかめに似、いつもはだしで爪も黒く長いのでした。ところが狐の方は大へんに上品な風で滅多に人を怒らせたり気にさわるやうなことをしなかったのです。[12]

狐の樺の木への接し方は、（細部に於て違いはあるが、根本的に）提婆達多（以下本作品中の「提婆達多」を「提婆」と略称する）の女へのそれと通ずるところがないだろうか。いや、提婆は「忽然として愛すべき鳩と」変身するのだから狐とは違う。然り。だから、この対照により、「獅子」（の側面）と「鳩」（の側面）とを土神と狐とがそれぞれ分け持っているのではないか、との考えが導き出される。しかし、この一例のみを以て右のように言うのは、武断に過ぎるであろう。探索

を進めよう。

☆ 提婆達多は器量惡く起きあがつて面頰をぬいだ。彼は茫然自失した。①大地が足下に沈んでゆくやうな氣がした。彼は凡ての他の人々とおなじく悉達多が將來佛陀となることを知らなかつたごとくこの太子が今日の優勝者であらうとは夢想だもしなかつたのである。提婆達多は我知らず王女のはうを見た。彼女は②顏を赤めて伏目になつて身じろぎもせずにゐる。彼は譽へやうのない失望落膽のうちに辛うじて慰藉を得た。それは彼女が彼の不幸な敗北を悲しんでくれるのだと思つたから。その時悉達多はかの白象に乘つて退場しながら思に沈んで立去りかねてゐる提婆達多にむかつて③挑戰するやうに呼びかけた。

「提婆達多」

提婆達多は愕然として顧みた。④そしてこれ見よがしにかの弓を振りかざしてゐる悉達多を見た。⑤提婆達多はさつと顏色をかへた。そして脣をふるはせながら無言のまゝにはたと相手を睨めつけた。悉達多は嗜みのない我ふるまひを悔ゆるやうに顏を背けてさりげなくそのまゝ退場した。提婆達多は他の王子たちの後に一人はなれて退場しながら今もなほ彼女の溫みの殘るかと思はれるその紫の敷物のうへに坐つてしづ〳〵とひきあげてゆく敵の後姿をいつまでも〳〵見送つてゐた。(13)

★ 土神はいろいろ深く考へ込みながらだんだん樺の木の近くに參りました。そのうちたうたうはっきり自分が樺の木のとこへ行かうとしてゐるのだといふことに気が付きました。すると俄かに心持がおどるやうになりました。②ずゐぶんしばらく行かなかつたのだからことによつたら樺の木は自分を待つてゐるのかも知れない、どうもさうらしい、さうだとすれば大へんに気の毒だといふやうな考が強く土神に起つて来ました。①土神は草をどしどし踏み胸を踊らせながら大股にあるいて行きました。ところがその強い足なみもいつかよろよろしてしまひ土神はまるで頭から青い色のかなしみを浴びてつっ立たなければなりませんでした。それは狐が来てゐたのです。もうすっかり夜でしたが、ぼんやり月のあかりに澱んだ霧の向ふから狐の声が聞えて来るのでした。(14)

（――線工藤、以下同様）

――線部①（以下「――線部」という言葉を省略）は、提婆が思わぬ不覚を取って敗れた直後の様子を表現したものである。①′「心持がおどるやう」であった土神も「狐が来てゐた」ことによって「強い足なみもいつかよろよろしてしま」ったのである。似ていないであろうか。

②は提婆の根拠なき自信・思い込みを表す。(c) ②′がそれに対応する。

③④は勝者の態度を表し、⑤はそれに対する提婆の反応である。次に示す③′③″が③④に対応し、⑤′が⑤に対応する。

★ そのときです。狐がやって来たのです。

狐は土神の居るのを見るとはっと顔いろを変へました。(a) けれども戻るわけにも行かず少しふるえながら樺の木の前に進んで来ました。

「樺の木さん、お早う、そちらに居られるのは土神ですね。」狐は赤革の靴をはき茶いろのレーンコートを着てまだ夏帽子をかぶりながら斯う云ひました。

「わしは土神だ。いゝ天気だ。な。」土神はほんたうに明るい心持で斯う言ひました。狐は(b) 嫉ましさに顔を青くしながら樺の木に言ひました。

「お客さまのお出での所にあがって失礼いたしました。これはこの間お約束した本です。それから望遠鏡はいつかはれた晩にお目にかけます。さよなら。」

「まあ、ありがたうございます。」と樺の木が言ってゐるうちに③′狐はもう土神に挨拶もしないでさっさと戻りはじめました。樺の木

はさっと青くなってまた小さくぷりぷり顫ひました。

土神はしばらくの間たゞぼんやりと狐を見送って立ってゐましたがふと狐の赤革の靴のキラッと草に光るのにびっくりして我に返ったと思ひましたら俄かに頭がぐらっとしました。③狐がいかにも意地をはったやうに肩をいからせてぐんぐん向ふへ歩いてゐるのです。土神はむらむらっと怒りました。⑤顔も物凄くまっ黒に変ったのです。美学の本だの望遠鏡だのと、畜生、さあ、どうするか見ろ、といきなり狐のあとを追ひかけました。樺の木はあわてゝ枝が一ぺんにがたがたふるえ、狐もそのけはひにどうかしたのかと思って何気なくうしろを見ましたら土神がまるで黒くなって嵐のやうに追って来るのでした。ⓒさあ狐はさっと顔いろを変へ口もまがり風のやうに走って遁げ出しました。(17)

ⓐⓑⓒは狐の動作であるが、〝顔色を変える〟という表現上の類似を有する。特にⓒは⑤と全く同一の表現となっている。土神と狐は提婆の分身と言っていいのではなかろうか。

(他に、〔片や提婆ではなく悉達多の動作であるが〕「呼びかけ」の行動と無言で去ってゆくところ、心情は異なるが外形としては一緒である。)

☆　悉達多は何故かゝる思慮をかいた無作法をしたか。それはあまりに自分にも意外であつた勝利に有頂天となつた若者のその場かぎりの出來心であつたか。またはその父とおなじく稀代の重寶を危く我手にとゞめ得た狂喜からであつたか。或は……いづれにせよ彼は提婆達多に對して些の敵意をもつてはゐなかつた。彼は自今日の勝利の僥倖であることを知つてゐた。それ故彼の行爲は寧一場の戯と見るべきであつたかもしれない。さりながら彼に於てそれが事實戯であつたにせよ提婆達多にとつてはそれは決して一場の戯として見逃すことは出來なかつた。彼はすでに萬人の目の前に、殊に幾百の宮女とかの耶輸陀羅のまへに敗北者となつてその①平生の矜恃に相當した屈辱、訴ふるところもない不平に面もあげ得ずにゐた。彼は幾萬の人にとり圍まれた競技場のまん中で獄

門にかけられてゐる氣持であつた。彼は全身に無數の耳目が出來て凡ての觀衆が彼のために同情の言葉を囁き同情の眼を注ぐのを見るやうな氣がした。彼はそれがたまらなかつた。②彼は常に勝利に輝く者であらねばならぬ。彼は常に讃嘆され渇仰されねばならぬ。彼は常に光背を負うて歩かねばならぬ。然るに今や彼は最もよく考へても他から同情され憐まれる者であつた。敗北。それは已に彼にとつて十分であつた。かゝる地位に蹴落されたうへに他人から同情され憐まれる。それは口を開いた傷口をせゝられるに過ぎない。

「これは何事だ」

提婆達多は思つた。彼はせめて相手が難陀であつたらと思つた。おなじく敗れるならば敵らしい敵に敗られたい。いはゞ③名もない雑兵に首をかゝれたこの屈辱。

[工藤注　十行分の章間余白]

八

④彼は常々己と全く性格を異にした、陰氣臭い、瞑想好きな、徒に痩せて長大な、武藝や風采を念とせぬ、彼の考に從へば男らしい男ともみえぬ悉達多を好かなかつた。竊に輕蔑してゐた。然るにその⑤醜い腑甲斐ない雑兵は彼の不意を襲つて首をかいたばかりかその面に唾を吐きかけた。彼の血は燃えあがつた。彼はこのまぐれあたりの弱敵に對して消しがたい鬱憤と憎惡を抱いた。彼には今度の出來事の全體が彼を陷れんがために殊更にたくらまれた詭計のやうに考へられた。そしてその卑劣な張本人が悉達多であつたかのごとくあらゆる敵意がそこに集中した。[後略][18]

★「狐さんにでも聞いて見ましたらいかゞでございませう。」

土神と狐の物語

樺の木はうっとり昨夜の星のはなしをおもってゐましたのでつい斯う云ってしまひました。

この語を聞いて土神は俄かに顔いろを変へました。そしてこぶしを握りました。

「何だ。狐？　狐が何を云ひ居った。」

樺の木はおろおろ声になりました。

「何も仰っしゃったんではございませんがちょっとしたらご存知かと思ひましたので。」

①′「狐なんぞに神が物を教はるとは一体何たることだ。えい。」

樺の木はもうすっかり恐くなってぷりぷりぷりゆれました。土神は歯をきしきし嚙みながら高く腕を組んでそこらをあるきまはりました。その影はまっ黒に草に落ち草も恐れて顫えたのです。

④′「狐の如きは実に世の害悪だ。たゞ一言もまことはなく卑怯で憶病でそれに非常に妬み深いのだ。うぬ、畜生の分際として。」

樺の木はやっと気をとり直して云ひました。

「もうあなたの方のお祭も近づきましたね。」土神は少し顔色を和げました。

「さうぢゃ。今日は五月三日、あと六日だ。」

土神はしばらく考へてゐましたが俄かに又声を暴らげました。

①″「しかしながら人間どもは不届だ。近頃はわしの祭にも供物一つ持って来ん、おのれ、今度わしの領分に最初に足を入れたものはきっと泥の底に引き擦り込んでやらう。」土神はまたきりきり歯嚙しました。[19]

①及び②で表現されている「平生の矜恃」に該当するのが、①′と①″である。自分は神であるから「畜生の分際」より偉いのが当然であり、「人間ども」は当然「供物」を「持って来」るべきものと「平生」考えていることを表そう。

④と④″が対応する。相手の欠点（と自分が考えるところのもの）を羅列するやり方が似ている。

③⑤は、自分より劣位である（と思っていた）相手に負けたことから生じる「屈辱」と「憎悪」が描かれている。次に示す箇所がそれに当るであろう。

★［前略］おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気にかけなければならないといふのは情ない。それでも気にかゝるから仕方ない。「後略」[20]

★　土神はもう居ても立っても居られませんでした。狐の言ってゐるのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教へてゐたのが今度はできなくなったのです。あゝつらいつらい、もう飛び出して行って狐を一裂きに裂いてやらうか、けれどもそんなことは夢にもおれの考へるべきことぢゃない、けれどもそのおれといふものは何だ結局狐にも劣ったもんぢゃないか、一体おれはどうすればいゝのだ、土神は胸をかきむしるやうにしてもだえました。[21]

☆　提婆達多は地獄の苦悩をうけた。①彼は殆ど狂暴な狩獵に氣をまぎらさうとしたが何のかひもなかつた。さしもに強い彼の肉體も身心の過度の試練に疲れはてた。②彼は眠ることも食ふことも出來なかつた。彼の頭には絶えず一つ事が水車のやうに廻つてゐた。迦毗羅婆蘇都、耶輸陀羅、仕合、悉達多、別宴、迦毗羅婆蘇都……そしてそれはさながら同じ事實が眼前に綴返されるかのごとく彼にまさ〳〵と同じ苦痛、憤怒、憎惡、嫉妬を喚起した。彼は一方にその苦悶から逃れよう〳〵とあせりながら一方には反對に飽くまでも我からその苦い記憶を呼びさましてその苦悶に身を委ねた。③惡念は悉達多のはうへのみ向けられた。提婆達多はいかなる場合にも決して眞に女を憎むことが出來なかつた。なぜならば一切の女は本來彼に好意をもちまた彼の藥籠中のものと考へてゐたので。彼は自ら陷つた笑止な憫然な地位に對する羞恥をそのまゝ悉達多に對する憎惡にかへた。

④「悉達多がなんだ」

土神と狐の物語

彼は思つた。

「あの陰氣臭いひよろ長い男が。腕前なら男前なら己の足を甜めるにも足らないじやないか。」

とはいへそれはなんの足しにもならなかつた。その腑甲斐ない男にまんまと女を浚はれたのは彼であつた。彼はまた思つた。

⑤「あんな女がなんだ」

そして自分がこれまでに弄んだ、これから弄び得る美しい女の大勢について考へた。また悉達多との艶福の差について。併し今更そんなことは氣休めにさへならなかつた。事實彼はみじめな敗北者であつたから。(22)

★②土神はたまらなさうに両手〔で〕髪を掻きむしりながらひとりで考へました。おれのこんなに面白くないといふのは第一は狐のためだ。狐のためよりは樺の木のためだ。狐と樺の木とのためだ。けれども③樺の木の方はおれは怒ってはゐないのだ。樺の木を怒らないためにおれはこんなにつらいのだ。樺の木さへどうでもよければ狐などはなほさらどうでもいゝのだ。④おれはいやしいけれどもとにかく神の分際だ。それに狐のことなどを気にかけなければならないといふのは情ない。それでも気にかゝるから仕方ない。⑤樺の木のことなどは忘れてしまへ。ところがどうしても忘れられない。今朝は青ざめて顫えたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘られない。①おれはむしゃくしゃまぎれにあんなあはれな人間などをいぢめたのだ。けれども仕方ない。誰だってむしゃくしゃしたときは何をするかわからないのだ。

土神はひとりで切ながってばたばたしました。空を又一疋の鷹が翔けて行きましたが土神はこんどは何とも云はずだまってそれを見ました。

ずうっとずうっと遠くで騎兵の演習らしいパチパチパチパチ塩のはぜるやうな鉄砲の音が聞えました。そらから青びかりがどくどくと野原に流れて来ました。それを呑んだためかさっきの草の中に投げ出された木樵はやっと気がついておづおづと起きあがりしきりにあたりを見廻しました。

それから俄かに立って一目散に遁げ出しました。三つ森山の方へまるで一目散に遁げました。

土神はそれを見て又大きな声で笑ひました。その声は又青ぞらの方まで行き途中から（ママ）ハサリと樺の木の方へ落ちました。

樺の木は又はっと葉の色をかへ見えない位こまかくふるひました。

土神は自分のほこらのまはりをうろうろうろうろ何べんも歩きまはってからやっと気がしづまったと見えてすっと形を消し融けるやうにほこらの中へ入って行きました。

（四）

八月のある霧のふかい晩でした。土神は何とも云へずさびしくてそれにむしゃくしゃして仕方ないのでふらっと自分の祠を出ました。足はいつの間にかあの樺の木の方へ向ってゐたのです。本統に土神は樺の木のことを考へるとなぜか胸がどきっとするのでした。そして大へんに切なかったのです。このごろは大へんに心持が変ってよくなってゐたのです。ですからなるべく狐のことなど⑤樺の木のことなど考へたくないと思ったのでしたがどうしてもそれがおもへて仕方ありませんでした。おれはいやしくも神ぢゃないか、⑤一本の樺の木がおれに何のあたひがあると毎日毎日土神は繰り返して自分で自分に教へました。それでもどうしてもかなしくて仕方なかったのです。殊にちょっとでもあの狐のことを思ひ出したらまるでからだが灼けるくらゐ辛かったのです。[23]

①と①′が対応する。「氣をまぎら」す為の「殆ど狂暴な狩獵」が「何のかひもなかった」如く、土神の「やっと気がしづまった」のも「自分のほこらのまはりをうろうろうろうろ何べんも歩きまはってから」のことであった。

②と②′、苦悩とその原因を反芻する様子である。

そして③と③′、④と④′（④′の箇所前引）、⑤と⑤″⑤‴に対応・類似を見ることができる。

☆ ト筮と占星によつて定められた婚姻の日が日一日と近づいてきた。釋迦族の諸王の城市はその噂で湧きかへつた。悉達多と耶輸陀羅は恰も古譚中の勇士と美人のやうにつくりあげられてしまつた。①提婆達多の惱は譬へやうもなかつた。②彼の頭には「殺害」の考が絶えず往來した。彼は實際短劍の刄に毒を塗りさへした。そして彼に些の休息も安眠も與へぬ臥榻に身を横へながら膾にしても飽足らぬ③悉達多を刺殺す光景を想像した。彼は思つた。

「ひと思に殺してはいけない。苦痛が永引くやうにすこし急所をはづさなくてはいけない。肺を刺してはならぬ。心臓もよけなくてはならぬ。脇腹を程よくあまり深くないやうに……」

彼はとつぷりと毒を塗つた短劍の先がぶつりと相手の肉へくひこむところを思つた。それから傷口が糜爛して柘榴みたやうに口をあいて紫色の腐れがだん〳〵内臓のはうへひろがつてゆくところを、五體を痙攣させて七顚八倒して呻くところを、……そんな慘忍な想像に耽つてゐる時彼の歪めた口もとにはさも氣味のよさゝうな微笑がもれた。④併しながらこんな復讐は到底彼を滿足させることは出來なかつた。彼はまた思つた。(24)

★ふんと狐の謙遜のやうな自慢のやうな息の音がしてしばらくしいんとなりました。

①土神はもう居ても立つても居られませんでした。狐の言つてゐるのを聞くと全く狐の方が自分よりはえらいのでした。いやしくも神ではないかと今まで自分で自分に教へてゐたのが今度はできなくなつたのです。①あゝつらいつらい、もう②飛び出して行つて狐を一裂きに裂いてやらうか、④けれどもそんなことは夢にもおれの考へるべきことぢやない、けれどもそのおれといふものは何だ結局狐にも劣つたもんぢやないか、一体おれはどうすればいゝのだ。①土神は胸をかきむしるやうにしてもだえました。(25)

(この箇所二行目以下前引)

提婆(①)・土神(①′①″①‴)は悩み苦しむ。そして「「殺害」の考」を抱く(②と②′)。「殺害」の具体的方法迄考える(③と②′)。が、実行はしない(④)。土神もこの時は踏みとどまつたのであつた(④′)。

☆ 提婆達多はとう〳〵最初から知つてゐながらことさら觸れなかつた、觸れることをおそれてゐた點に否應なしに出くはさねばならなくなつた。

「耶輸陀羅は自分の戀の手品を感づいたのではないか」

それは今更霽天の霹靂のやうに彼を驚かした。その卑劣な奸惡な動機。その醜惡な獸的な戀。かつて悉達多の不意の出家のためにものゝあやめも分らなくなつておぞくも彼のさしだした毒酒に醉はされてしまつた彼女が夫の歸來によつて惡醉から呼びさまされて彼の戀の眞相を看破したのだと思つた。

「耶輸陀羅は己を嫌つた。卑しんだ。蔑んだ。」

彼はたまらなくなつた。彼自身まさにそれに値する人間であるにもかゝはらず、彼はいかなる種類いかなる程度の侮蔑にも堪へない矜をもつてゐた。彼は絶望の聲をもらした。そして氣ぬけがしたやうに身じろぎもしずにゐた。この時きれいにかいだされた泥水のあとへじいつと清水が湧いてくるやうに懺悔の心が彼の胸底に湧いてきた。そして忽ちに胸一杯になつた。彼は彼女の美しさを、それにひきかへて自分の醜さを思つた。そしてその清淨な彼女を惡念と慾望の餌として骨までもしやぶつた己の罪を思つた。彼は慚ぢ且つ愧ぢた。①彼は自分をたゝきつけて踏んで〳〵踏みにじつてやりたかつた。彼は臥榻にうつ伏して兩手で顏をかくした。それはさながら神恕を乞ふ懺悔者の姿であつた。とはいへ彼は祈るべき神をもたなかつた。そしてそれだけ彼の惱はやるせがなかつた。その時ふと未だ嘗て思ひもかけなかつた考が彼の頭に浮んだ。

②「耶輸陀羅のところへいつて懺悔しよう。さうだ。すつかりうちあけて懺悔してしまはう」

それは彼にとつては破天荒の思ひつきであつた。彼がみづから他人のまへに己を卑くして告白し懺悔する。それはこれまで想像するだけでも屈辱を感ずる忌しい考であつた。彼は己の罪過の有無にかゝはらずみづからを何人のうへにも遙に高くしてゐた。實にこの時までも彼は彼自身なるが故に何人よりも尊かつた。

彼はじり〳〵して夜の明けるのを待つた。そして明方疲勞の極、ほんのすこしのあひだうと〳〵とした。そしてなにか息のつまるほど苦しい厭な夢を見た。彼は朝の光がさすと同時に目をさましてあたふたと身じたくをはじめた。しかもこの場合にあつてす

ら折角③容姿をとゝのへることを忘れなかつた。④彼はいつも彼女との會合の前後に久しいこと鏡に向つてゐるのがならひであつた。自分の容姿に對する自信は非常に彼を幸福にした。それはこの最後の時までも彼の忠實な味方であつた。すくなくとも彼自身はさう思つた。⑤彼は侍者にターバンのひとつの襞、髪の毛のひと筋もゆるがせにさせなかつた。彼は入念に盛裝して風姿堂々と馬車を驅つて迦毗羅婆蘇都へと向つた、流石に懶く力ない眼をとぢてしば〳〵太息をもらしながら。(26)

☆ 提婆達多は佛弟子となつた。このゝち兇賊鴦窶利摩羅にも鎖されなかつた教團の門は提婆達多にもまた開放されてあつた。あらゆる人生の幸福を約束されたる王族の生活をすてゝはづかに行乞によつて露命をつなぐ比丘となることは彼にとつては、寧ろ死よりも辛いことであつた。彼は敢て自ら進んで比丘となつた。たゞ復讐の機會を見出さんがためにのみ。彼は己我宮殿に榮華を縱にすとも悉達多をして安穩に得意の日を送らしむることは到底忍び得なかつた。それほど彼の憎惡、怨恨……は強く且つ執拗であつた。今や彼の所有とては三衣、鉢、剃刀、針、水濾袋……それしきのものであつた。⑥彼が日々の行乞から歸るにあたつて彼をまつところのものは、よしそれが祇園精舎や竹林精舎のごとき宏壯なる精舎であつたにせよ、些の溫みも潤ひもないたゞの空室であつた。況やその他の場合にあつてはそれは見すぼらしい草ぶきの木造小屋、岩窟、そして屢々なんの屏障もない一樹の蔭であつた。(27)［後略］

★ 二人はごうごう鳴って汽車のやうに走りました。

「もうおしまひだ、もうおしまひだ、望遠鏡、望遠鏡、望遠鏡」と狐は一心に頭の隅のとこで考へながら夢のやうに走ってゐました。

向ふに小さな赤剥げの丘がありました。狐はその下の円い穴にはいらうとしてくるっと一つまはりました。それから首を低くしていきなり中へ飛び込まうとして後あしをちらっとあげたときもう土神はうしろからばっと飛びかかってゐました。と思ふと狐はもう土神にからだをねぢられて口を尖らして少し笑ったやうになったまゝぐんにゃりと土神の手の上に首を垂れてゐたのです。

①土神はいきなり狐を地べたに投げつけてぐちゃぐちゃ四五へん踏みつけました。

それからいきなり狐の穴の中にとび込んで行きました。中はがらんとして暗くたゞ赤土が奇麗に堅められてゐるばかりでした。土神は大きく口をまげてあけながら少し変な気がして外へ出て来ました。[28]

★「見せてあげませう。僕実は望遠鏡を独乙のツァイスに注文してあるんです。来年の春までには来ますから来たらすぐ見せてあげませう。」狐は思はず斯う云ってしまひました。そしてすぐ考へたのです。あゝ僕はたった一人のお友達にまたつい偽を云ってしまった。あゝ僕はほんたうにだめなやつだ。けれども決して悪い気で云ったんぢゃない。よろこばせやうと思って云ったんだ。あとですっかり本統のことを云ってしまはう、狐はしばらくしんとしながら斯う考へてゐたのでした。[後略][29]

★ 夏のはじめのある晩でした。樺には新らしい柔らかな葉がいっぱいについていゝかほりがそこら中いっぱい、空にはもう天の川がしらしらと渡り星はいちめんふるえたりゆれたり灯ったり消えたりしてゐました。

その下を狐が詩集をもって遊びに行ったのでした。仕立おろしの紺の脊広を着（ママ）赤革の靴もキッキッと鳴ったのです。[30]

①と①′が対応するわけであるが、①′の直前で「狐はもう土神にからだをねぢられて口を尖らして少し笑ったやうになったまゝぐんにやりと土神の手の上に首を垂れてゐた」、即ち死んでいた。それに①′を加えたのは①の影響を受けたということであろう。

提婆は「自分をたゝきつけて踏んで〳〵踏みにじってやりたかった」（傍点工藤）わけだが、この行為を土神が狐に対して行なったのである。二人が提婆の分身である証左となろう。

提婆も狐も嘘をついていた。それを告白しようというのが②と②′である。「すつ（っ）かり」「しまはう」という言葉も一致している。

③④⑤は、提婆のダンディぶりを表す。③′も同趣の表現であろう。

⑥、提婆の住処の描写である。⑥′の狐のそれを連想させる。「見すぼらしい草ぶきの木造小屋」の方は、「丸太で拵えた高さ一間ばかりの土神の祠[31]」（★）を思わせる。

又、提婆「は野獣的な惡性のうちに野獣的なうぶな正直をもつてゐた[32]」（☆）とされるが、土神も「ごく乱暴で」（★）はあったが「正直で[33]」（★）もあったのだ。

☆　一夕提婆達多はさりげなく佛陀のもとへ行つた。それはちやうど佛陀が比丘衆と語つてゐる時であつた。提婆達多は衣服を整へ、右肩を袒ぎ、徐ろに佛陀の前に進んで佛足を頂禮してのち、跪いて合掌しつゝいつた。

「世尊よ、あなたももうよほど弱られたやうに見える。弟子たちのために説法なさるのも御苦勞のことゝ思ふ。今後は私がかはつて教團を指導しませう。あなたはたゞ禪定を修してひとり靜に法を樂まれるがよろしい」

佛陀は言下に拒絶した。

「私は舍利弗や目犍連夜那にさへ任さずにゐる。況んやお前のやうなものに任すことができると思ふか」

これは提婆達多がかつて受けたと稱する侮辱に十倍するものであつた。彼の面目は大衆の前でめちや〳〵に踏みつけられた。彼は憤怒に蒼ざめた。彼は佛陀にとびかゝるかと見えた。が自ら威儀を損せざらんがためにじつと怒を抑へた。そして默然と佛陀を拜してしづかに右遶三匝して去つた[34]。

前掲注（25）の引用文中、①′①″②′④′にぴたり当てはまるであろう。

☆「阿闍多設咄路」

提婆達多は恍惚とそなたの空を望みながら我を忘れて呼ぶ。そしてまた捕へられた獣のやうに痛内を行きつもどりつする。彼は阿闍多設咄路が彼を訪づれる時の様子を思ひだす。阿闍多設咄路は時には馬車を驅つてくることもあつたが多くは見事な栗毛馬に乘つ

てきた。彼は幾度その嘶きに胸を躍らせたか。阿闍多設咄路はひらりと鞍をはなれ、馬を木蔭につながせて精舎のはうへ進んでくる。そして彼のまへに近づくや五體を地に投じて彼の足を頂禮する。彼は踵に阿闍多設咄路の柔い掌を感ずる。その體は赤らみかけた果物のやうに水々しくすらりとしてゐる。若き王は微笑を浮めてすこしくはぢらひながらも流石に威儀をたもちつゝ問訊の言葉をのべる。その男らしい眉のあひだには氣高い憂愁の影が見える。とはいへその大きな涼しい眼は青春の力と喜に耀き、甘やかな頰には馨しい血の色が漲ってゐる。汗ばめる肌のつや、香油の匂、瓔珞のきらめき、彼はどうしてもそれを忘れることができない。[後略][35]

前掲注（23）の引用文中、「ところがどうしても忘れられない。今朝は青ざめて顫えたぞ。あの立派だったこと、どうしても忘られない」（★）と表現を同じくする。

以上の徴憑により、賢治は那珂『提婆達多』の影響下に「土神ときつね」を物した、と推定する。

二　「土神ときつね」

1　恋愛によらざる嫉妬

賢治は『提婆達多』から、表現上のヒントの他、何を読み取ったであろうか。『提婆達多』の筋展開の上で極めて特徴的なことは、前半の妻争いの場面に於てさえ、恋愛が介在していないということだ。現在と結婚に関する生活習慣が違うから当然だという事情によるのではないのは、作者が繰り返ししつこいぐらいに、次のような叙述をしていることから分る。

提婆達多の大な眼は鷹のやうに貪婪に輝いた。姫は純白の絹布を纏つて眞珠の頸飾とおなじ珠の手纏をつけてゐる。彼女は人々の眼にけおされるやうに伏目になつてゐるのでやさしげな瞳が長い睫毛になかばかくれてゐる。彼女はどこもかしこも尋常に出來てゐるがどこといつてとりたてゝ人目をひくやうなところはない。たゞ體が程よくすらりとしていかにも釣合がよい。そして流石に王女にふさはしくどことなく靜に奥ゆかしく情深さうにみえる。

提婆達多は見た。そして

「なんだ」

と思つた。彼は勝手に孔雀のやうな乙女を想像してゐたのであつた。

「己はまあまつぴらだ」

いたくも期待を裏切られた彼は首圖馱那王や他の王子たちと一緒に行列にくははつて城門をくゞりながらなんだかうま〳〵と騙されたやうな不滿を感じた。まことに耶輸陀羅はひとたび翼をふるつて衆鳥を驚かすところの孔雀ではなかつた。やさしい鷗であつた。[36]

それは彼が彼女を愛するからではなく、また彼女が拘利の王女であるからでもなく、たゞ彼女が今日の仕合の本當の賭物だと思はれ、そしてそれが今や相手の手に渡つたものであるゆゑに一層彼が喜んで得意にうけることのできる唯一の同情であつた。

「悉達多、誇るなら誇れ、弓や象は貴樣にやつた。だが女だけはこつちのものだぞ」

これが彼の苦しい胸のうちであつた。[37]

（注（c）掲出初めの引用文から続く箇所）

彼はかう考へた。そして毒刄よりも一層有毒且有効らしい、自信ある彼の天賦の魅力、手練手管の惡辣な武器をもつて如何にしても耶輸陀羅を我物にしようと決心した。もとよりこの冒險の頗大膽であり困難であることはよく承知してゐた。併し結局の成功を疑はない故にそれはそれだけ張合のあるものとなつた。實のところ彼は耶輸陀羅そのものに對してはたゞ一般に男が女に對してもつほどの單に性の相違からくるところの牽引のほか殆ど何も感じてはゐなかつた。けれども今彼女は指もさされぬ他人の持物で

あつた。殊に憎んでもあまりある敵によつて克取られたところの。そして相手はそれによつて無上の幸福を得たやうにみえる。それ故彼は無理にも非道にも女を手に入れねばならなかつた。彼は他のものに食はせまいとしては己の吐いた物をも食ひもどす犬であつた。(38)

「私はあなたを騙した。私はちつともあなたを思つてはゐなかつた。たゞ意地と嫉妬と復讐のためにあなたをとらうとした。私は仕合の日から悉達多を憎んでゐた。そしてあなたをつけねらつた。悉達多の出家をそゝのかしたのは私だ。私はあなたが若いばかりにあなたを抱きたいと思つた。私はあらゆる若い女を抱いてみたかつた。あなたが人のものだからなほさら抱いてみたかつた。一度抱いてからはたゞ氣ちがひじみた慾望からさんざんにあなたを弄んだ。私はあなたがたわいなく騙されるのをみてあなたの馬鹿を笑つた。そしてあなたがよせてくださる情をさへうるさく思つた。私はどこまでもあなたをなぐさむつもりだつた。慾望のためには肉體を、復讐のためには貞操を。そして思ふさまなぐさんだあげくにはあなたをつきはなすつもりだつた。さうしたらいつか私はあなたのまごゝろに動かされてしまつた。私は戀を知つた。それと同時にあなたの美しさがはじめてわかつた。それにひきかへて自分の穢いことがしみ〴〵とわかつた。(39)

提婆の告白にその行動理由が述べられているが、別に作者自身、次のように説明している。

耶輸陀羅を手に入れた提婆達多はその復讐計畫の成功に對する滿足よりは寧ろそのあまりにあつけなかつたことに對する不滿のほうをより多く感じた。彼の考にしたがへば彼女は最初から必ず彼の獲得せねばならぬほどの女ではなかつた。たゞ彼女が特種の場合に彼の野心をそゝるやうな地位におかれたゝめに兎に角問題となつたまでのことで、そしてそれに關して己の自尊心が傷けられたばかりに彼女はどうあつても我ものとせねばならぬものとなつたのである。それゆゑ彼はこの情事に於ては目的よりも道程のほうに興味をもつてゐた。道程が困難であればあるほど、山が多ければ多いほど面白かつた。張合があつた。最後の勝利はゆめ疑はなかつたので。とはいへ今女を手に入れてみれば流石に彼とても己の肉的所有物に對する我々動物一般の本能的な愛着を起さずにはゐられ

なかつた。それは常に強ければ強いほどそれだけ醜いところの。彼はまたこの新規の肉團に對して好奇的愛玩心、新鮮熾烈な欲情を催した。それは彼にあつては若干日の後には約束したやうに倦怠、厭惡と地位をかへるところのものであつた。そこで先見ある彼はこの牝馬を使へるうち出來るだけ使つておかうといふ經濟的な考からしても飽くまで彼女の身心を貪り弄んだ。[40]

賢治は、右の特徴に感じるところがあったのではないだろうか。[d]

提婆の行動原理、つき動かす原動力を一言で言えば嫉妬であろう。但し、恋愛によるものにあらず、という限定付きであるが。[e]

ここで、(先の引用文の告白にもある如く)提婆は後に耶輸陀羅の「まごゝろに動かされて」真実の「戀を知つた」のではなかったか、という反論・疑問が出るかも知れない。確かにそうだ。しかし、そうなっていったのは、悉達多が出家して不在の内である。嫉妬する相手がいないのである。そして、作品の後半では、耶輸陀羅は「自刃」[46]したので存在していないのである。尤も正確を期すならば、提婆が真実の「戀を知つ」て後耶輸陀羅の「自刃」迄の間に恋愛による嫉妬と思われる箇所があることはある。「年老いた」父「首圖馱那王」の「生前今一度その子を見たいといふ切な」「請を容れ」「佛陀」が「迦毗羅婆蘇都へ」[47]戻って来ることになった時の提婆の「耶輸陀羅が彼を悉達多に見かへるのではないかと」いう「煩悶」[48]がそれによるものであろう。しかし、この後告白、耶輸陀羅の提婆への愛の確認、そして「自刃」が続き、この(恋愛による嫉妬の)箇所の全体に占める割合は、分量的にも又重要性から言っても狭小である。

2 修羅

恋愛によらざる嫉妬とはどういうものであろう。提婆の行動と心理に徴して約言すれば、自分を「常に勝利に輝く者であらねばならぬ」と考える者が負ける筈のない相手に負けた時に抱くねたみの感情ということであろう。賢治は提婆の姿・心性に、『本化聖典大辭林』の一節「猜忌嫉妬の心を以て他に勝たんことを欲し、常に戰ひ諍ふことを好むを修羅根性といふ」[49]がぴたり当てはまるのを感じたのではなかろうか。更に、提婆の「憤怒」という要素を考え合せれば、提婆の修羅性の特徴を、次に示す『佛教大辭彙』の説明中の「嫉恚」の一語に代表させ得ることに心付いたであろう。

アシュラ　阿修羅　asura　六道の一。漢字音、阿須羅・阿素羅・阿蘇羅・阿素洛・阿須倫・阿索羅に作り、略して修羅といふ。非天、不端正・無妙戯又は無酒・不飲酒等と譯す。大婆沙論卷百七十二に曰く、「素洛は是れ天なり。彼は天に非ざるが故に阿素洛と名づく。復次に素洛は端政と名づく、彼は端政に非ざるが故に阿素洛と名づく。彼は諸天を憎嫉し、得る所の身形端政ならざるを以ての故に。復次に素洛は同類と名づく、彼は先に天と相近く住し、然も類同じからざるが故に阿素洛と名づく。世界初成の時、諸阿素洛は先づ蘇迷盧の頂に住みしが、後に極光淨天の壽盡き業盡き福盡きしが故に、彼天より沒して、是の中に來生し、勝妙の宮殿自然に出でたり。諸阿修羅心に嫉恚を生じ卽ち之を避けたり。此後復第二天に生じ彼更に處を移すとありて乃至三十三天、妙高山の頂に徧く次第に住せしかば、彼極めて瞋恚し卽ち退下せり。然るに諸天衆は初生の時咸之を指して此は我が同類に非ずといへり、斯に由りて轉展して非同類と名づく。復嫉恚を生ずるに由るが故に形端政ならず、卽ち此を以て非端政と名づく」と。[後略][50]

「嫉恚」という特性が、(専ら)土神と(そして一部)狐にも当てはまっている。しかし、「土神ときつね」にあっては、『提婆達多』と違って恋愛の局面に於てのそれではなかろうか(という疑問が生じるであろう)。

3　恋　愛

秋枝美保は、大沢正善説[51]を批判して、次のように述べた。

童話「土神と狐」は、大正十年前後の宮沢賢治の表現意識を考える上で見過すことのできない作品である。それが、詩篇「春と修羅」における、「まことのことば」を失った「修羅」の問題と重なることも既に指摘されてきた。最近では、大沢正善氏の「『土神と狐』とその周辺―『修羅』の克服」が、表現の問題を射程に入れたトータル、かつ詳細な論として、出色のものである。［中略］

童話「土神と狐」は、女の樺の木を恋する土神と狐が、それぞれに恋ゆえに嫉妬に悩むという物語である。これまで、この作品は、賢治の童話の中でも、恋愛感情の生々しさを描いた作品として、注目されてきた。だが、大沢氏の論の中では、恋愛の問題が、比較的軽視されている感を受ける。氏は、この作品が、恋愛の三角関係を構成していることを認めながらも、「三角関係は本来、恋愛に限らない人間関係の網の目の最小単位であり、主人公とその欲望の対象とそこに介在するライバルの三者が、欲望を触発、牽制しあう相互媒介の様相によって様々に機能する。」（傍点筆者）と述べており、恋愛の要素に対しては消極的な姿勢である。したがって、氏の読みにおいては、土神と狐の葛藤は、「相手を敵対視するばかりで学ぶべきは学ぶ心を閉じた」ことに由来し、「土神と狐の『知』の媒介不全」が三角関係の悲劇を招くということになる。「学ぶ」とか「知」といった表現に、氏の作品理解の姿勢は暗示されているが、この作品は、そのような精神的な認識レベルのみの問題を描いた物語なのだろうか。土神も狐も、恋ゆえに、そもそも、相手に学ぶといった冷静な判断を持ち得ない、どうしようもない感情にかられているのであって、問題はそういった心的な状態そのものにあると言ってよい。氏の読みでは、その心情レベルの問題が素通りされてしまうことになりはしないか。

また、氏は、土神と狐の分裂が、「『修羅』の苦悶を三角関係を借りて展開する虚構上の要請から」描かれたとも述べており、作品内の三角関係は、「虚構上の要請から生じた」設定だという見方を示している。ここでも、やはり、恋愛の過程で、土神と狐に分裂せざるを得なかったと思われる作者の心的レベルの問題が素通りされていると感ずる。［後略］[52]

（原注番号を省略、以下同様。なお、「傍点筆者」とある「筆者」とは秋枝美保）

秋枝美保の言う「恋愛の問題」は、作品内設定としてのそれのみを指すのではない。「「土神と狐」は確かに賢治の個人的な恋愛体験の中から生まれてきた作品で」[53]あるとも言うのである。

確かに、伝記を繙けば、賢治の恋愛の実体験を拾い出すことは可能だ。それどころか、「土神ときつね」の「現存草稿の執筆は大12か」[54]と推測されているまさにその大正十二年に賢治が片恋を経験していたらしいという推論もなされている。[55]しかし、いずれの恋においても、(三角関係的)嫉妬の影(又修羅の他の特性も)を、作品から又伝記中から見出し難いのである。[f]

では、秋枝美保が先の引用文に引き続いて述べている次の箇所、

[先の引用文から続く]天沢退二郎氏が既に指摘しているとおり、詩篇「春と修羅」においては意図的に匿されてはいるが、『『春と修羅』における修羅意識の発見が、ある『恋』を契機としていることは明らか」であって、「まことのことば」を失わせ、表現についての苦悩を生じさせたのが恋愛であったことは、確かであろう。そこに賢治自身の恋愛体験があったであろうことも既に指摘されてきている。とにかく、賢治にとっても、「土神と狐」においても、恋愛と表現の問題は不離の関係にあり、その両者の関係を論じることが、賢治の表現意識の問題を明かす第一歩である。[後略][58]

中の「恋愛」によって「生じ」た「修羅意識」とは何であろう。それは三角関係によって生じた嫉妬(の自覚)ではなくて、恋愛することそのものを指す。

ちいさな自分を劃ることのできない
この不可思議な大きな心象宙宇のなかで

もしも正しいねがひに燃えて
じぶんとひとと万象といつしよに
至上福しにいたらうとする
それをある宗教情操とするならば
そのねがひから砕けまたは疲れ
じぶんとそれからたつたもひとつのたましひと
完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする
この変態を恋愛といふ
そしてどこまでもその方向では
決して求め得られないその恋愛の本質的な部分を
むりにもごまかし求め得やうとする
この傾向を性慾といふ[59]

（「小岩井農場」）

賢治が恋愛に於て修羅意識を抱いたとすれば、それは右の「変態」（＝「宗教情操」からの逸脱）意識以外ではあるまい。

4　土神と狐の「恋」

「土神ときつね」は、秋枝美保の言うように、「女の樺の木を恋する土神と狐が、それぞれに恋ゆえに嫉妬に悩むという物語である」ように見える。しかし「よくよくこの二人を」観察し「て見たら」[60]、二人の「恋」は「じぶんとそれからたつ

たもひとつのたましひと／完全そして永久にどこまでもいつしよに行かうとする」という定義にはずれていることに気付く。狐が嘘つきである（が故な）のは言う迄もないが、「土神の方は正直で」[61]、純粋な愛情を樺の木に注いでいるのではないか。いや、必ずしもそうとばかりは言えないのだ。

最初に土神が樺の木と話す場面、二人の対話が成り立っていると言えるであろうか。土神は自分の疑問・考えを一方的に話す。樺の木の受け答えはおざなりだ。確かに、「樺の木はうっとり昨夜のはなしをおもってゐましたのでつい斯う云ってしまひました」という事情は説明されているし、樺の木が狐に惹かれているらしいのはこの文言からも明らかである（からおざなりであっても仕方ないとも言える）が、「この語を聞いて土神は俄かに顔いろを変へました」以下の土神の態度・反応（前掲注（19）の引用文参照）は、土神が樺の木との会話よりも狐との競争心に強く囚われている（ことを賢治が表現しようとした）ことを表す。[g]

最後の場面、

あるすきとほるやうに黄金いろの秋の日土神は大へん上機嫌でした。今年の夏からのいろいろなつらい思ひが何だかぼうっとみんな立派なもやのやうなものに変って頭の上に環になってかかったやうに思ひました。そしてもうあの不思議に意地の悪い性質もどこかへ行ってしまって樺の木なども狐と話したいなら話すがいゝ、両方ともうれしくてはなすのならほんたうにいゝことなんだ、今日はそのことを樺の木に云ってやらうと思ひながら土神は心も軽く樺の木の方へ歩いて行きました。

樺の木は遠くからそれを見てゐました。

そしてやっぱり心配さうにぶるぶるふるえて待ちました。

土神は進んで行って気軽に挨拶しました。

「樺の木さん。お早う。実にいゝ天気だな。」

「お早うございます。いゝお天気でございます。」
「天道といふものはありがたいもんだ。春は赤く夏は白く秋は黄いろく、秋が黄いろになると葡萄は紫になる。実にありがたいもんだ。」
「全くでございます。」
「わしはな、今日は大へんに気ぶんがいゝんだ。今年の夏から実にいろいろつらい目にあったのだがやっと今朝からにはかに心持ちが軽くなった。」
樺の木は返事しやうとしましたがなぜかそれが非常に重苦しいことのやうに思はれて返事しかねました。
「わしはいまなら誰のためにでも命をやる。みみずが死ななけぁならんならそれにもわしはかはってやっていゝのだ。」土神は遠くの青いそらを見て云ひました。その眼も黒く立派でした。
樺の木は又何とか返事しやうとしましたがやっぱり何か大へん重苦しくてわづか吐息をつくばかりでした。(63)

では、二人の気持が完全にすれ違っている。と言うより、土神は樺の木の「心配」(=悲劇の予感?)に全く気が付かないのだ。一体土神は真剣に樺の木を愛して(その気持ちを)思いやっていると言えるであろうか。

右の場面の直後(右引用文から注(17)の引用文へと続く)に土神は狐を殺害する。土神は何故狐を殺したのであろう。樺の木を愛するが故か。いや違う。もし本当に樺の木を愛していたのなら、狐殺害が樺の木に与える衝撃を慮った筈だ。樺の木を悲しませることをする筈がない。以前にも一度、狐への殺意を抱いたことがあった(「もう飛び出して行って狐を一裂きに裂いてやらうか、けれどもそんなことは夢にもおれの考へるべきことぢゃない」)。その時踏みとどまったのも、樺の木のことを考えてのことでなく、自尊心故であったのだ。土神が狐を殺害したのは、樺の木への「恋ゆえ」でなく、「美学の本だの望遠鏡だのと、畜生、さあ、どうするか見ろ」という気持=嫉妬ゆえであった。

「土神ときつね」は、（土神と狐と樺の木の三角関係を描くのに重点があったのではなく、）題名通り、土神と狐の物語であった。

三　嫉　恚

賢治が自身抱いていた修羅意識、その修羅の特性として詩「春と修羅」に出てくる「詔曲」[64]以外に嫉恚即ち〈嫉〉と〈恚〉を数えることができる。先ず〈嫉〉であるが、それを表すものとして、「土神ときつね」と近い時期に書かれたと思われる書簡と作品から引用する。

久しぶりでお便りいたします[ママ]今日はおはがきをありがたうございました　あなたはお互に遠くはなれたと感じてお出でゞすか。私にはさう思はれません。はなれてゐたと云へばはじめからです。私の近状などはことさらお知らせするほどのことがないのです。もしその時々の感情をお便りするのでしたらこれもちかごろはすっかり鼠色の石の函の中へ蔵ひ込んでありますので、尤もこれをしまってでも置かなかったら本を一頁も読めないやうな環境のなかに私が居るのですから葉書さへ書く材料がないのです。その環境とはどう云ふ風のものか少しばかりおしらせしませうか。

古い布団綿、あかがついてひやりとする子供の着物、うすぐろい質物、凍ったのれん、青色のねたみ、乾燥な計算[ママ]その他。

これからさきのことは予定はしてありますがどう変るやら。とにかく私にはとても私の家を支へ行く力がありませんので多分これは許して貰へるでせう。三十余年を私のために柄にもない商売の塵のなかに閉ぢこもりなほ私を開放しやうとする私の父に感謝いたします。

いつになったら私共がえらくなるでせうかとあなたは二様にも三様にもとれるやうな皮肉を云ってゐられますが比較的にえらくな

るやうなことは考へません。外のひととくらべてといふことは私は好みません。勿論比較的劣ってゐる為でせう。[65]

（大正九年〔二月頃〕保阪嘉内宛№159。傍点賢治）

「ほう、いいなあ、又三郎さんだちはいいなあ。」

小さな小供たちは一諸に云ひました。

すると又三郎はこんどは少し怒りました。

「お前たちはだめだねえ。なぜ人のことを、うらやましがるんだい。僕だってつらいことはいくらもあるんだい。お前たちにもいゝことはたくさんあるんだい。僕は自分のことは一向考へもしないで人のことばかりうらやんだり馬鹿にしてゐるやつらを一番いやなんだぜ。僕たちの方ではね、自分を外のものとくらべることが一番はづかしいことになってゐるんだ。僕たちはみんな一人一人なんだよ。さっきも云ったやうな僕たちの一年に一ぺんか二へんの大演習の時にね、いくら早くばかり行ったって、うしろをふりむいたり並んで行くものの足なみを見たりするものがあると、もう誰も相手にしないんだぜ。やっぱりお前たちはだめだねえ。外の人とくらべることばかり考へてゐるんぢゃないか。[後略][66]

（「風野又三郎」）

すっかり夜になりました。耕平のうちには黄いろのラムプがぼんやりついて、馬屋では馬もふんふん云ってゐます。

耕平は、さっき頬っぺたの光るくらゐご飯を沢山喰べましたので、まったく嬉しがって赤くなって、ふうふう息をつきながら、大きな木鉢へ葡萄のつぶをパチャパチャむしってゐます。

耕平のおかみさんは、ポツンポツンとむしってゐます。

耕平の子は、葡萄の房を振りまはしたり、パチャンと投げたりするだけです。何べん叱られてもまたやります。

「おゝ青い青い、見る見る。」なんて云ってゐます。その黒光りの房の中に、ほんの一つか二つ、小さな青いつぶがまぢってゐるのです。

それが半分すきとほり、青くて堅くて、藍晶石より奇麗です。あっと、これは失礼、青ぶだうさん、ごめんなさい。コンネテクカット大学校を、最優等で卒業しながら、まだこんなこと私は云ってゐるのですよ。みなさん、私がいけなかったのです。宝石は宝石です。青い葡萄は青い葡萄です。それをくらべたりなんかして全く私がいけないのです。実際コンネテクカット大学校で、私の習ってきたことは、「お前はきょろきょろ、自分と人とをばかりくらべてばかりゐてはならん。」といふことだけです。それで私は卒業したのです。全くどうも私がいけなかったのです。

いや、耕平さん。早く葡萄の粒を、みんな桶に入れて　軽く蓋をしておやすみなさい。さよなら。[67]

（「葡萄水」）

もう一つ、「〔生徒諸君に寄せる〕」中の、「誰が誰よりどうだとか／誰の仕事がどうしたとか／そんなことを云ってゐるひまがあるのか[68]」。

「青色のねたみ」とは文字通り「ねたみ」であろうが、「青色」というのは、赤が燃え盛るイメージだとすれば、沈静はしているが潜伏継続しているという消息を示す表現ででもあろうか（それとも後出書簡の「いかり」の色に照らせば、極致に達した「ねたみ」であろうか）。書簡の最後の箇所と、作品（からの引用）三つは、賢治が「外のひととくらべてといふこと」を「好」まないということを表す。童話作品の方は、本筋と直接関らない挿入が敢えてなされていて、それだけに作者の生の声を聴き取ることができよう。（他に「どんぐりと山猫」も比較意識がテーマとなっていることは周知の通り。）

賢治が自身「外のひととくらべ」るということを全くしない人間、そういう発想を抱いたことのない人間であったとすれば、右のようなことは言わない（書かない）であろう。右は、賢治が比較意識に囚われやすく、従って〈嫉〉の自覚を持って常に自らに反省を迫っていたことを推測させるであろう。

〈恚〉に関しては、次の書簡に見える。

お手紙ありがたうございました

お互にしっかりやらなければなりません。突然ですが。私なんかこのごろは毎日ブリブリ憤ってばかりゐます。

何もしやくにさわる筈がさっぱりないのですがどうした訳やら人のぼんやりした顔を見ると、「えゝぐづぐづするない。」いかりがかっと燃えて身体は酒精に入った様な気がします。机へ座って誰かの物を言ふのを思ひだしながら急に身体全体で机をなぐりつけさうになります。いかりは赤く見えます。あまり強いときはいかりの光が滋くなって却て水の様に感ぜられます。遂には真青に見えます。確かにいかりは気持が悪くありません。関さんがあゝおこるのも尤です。私は殆んど狂人にもなりさうなこの発作を機械的にその本当の名称で呼び出し手を合せます。人間の世界の修羅の成仏。そして悦びにみちて頁を操ります。本当にしっかりやりませうよ。(69)

（大正九年〔六月～七月〕保阪嘉内宛№165）

賢治はかねてより提婆達多という人物に興味を抱いていた。そこに那珂『提婆達多』が出現し、一読するや、自らの修羅意識（の内の〈嫉恚〉）に相当するものが、恋愛に於けるそれと紛れない形で描かれていることに気付き、深く感じるところがあった。触発され、創作意欲を掻き立てられて、表現上のヒントも得つつ、やはり〈嫉恚〉を表現するのにやりやすい恋愛の形の三角関係の設定を一応藉りて（この意味で前引秋枝美保文中の大沢正善説に同意するところがある）、しかしあくまで〈嫉恚〉という修羅性をこそ中心主題として物したのが「土神ときつね」であった。

おわりに

土神（そして狐）は救われた（る）のであろうか。那珂『提婆達多』の最後は、次の二文で結ばれている。

もしそこに我々に救ひがあるならば、提婆達多こそまことに救はれるであらう。提婆達多が救はれずば、我々の誰が救はれるであらうか。[70]

何故こう言えるのか、何も述べられていない。唐突極まりない。しかし、賢治なら、（作者の意図は別として、）法華経提婆達多品を即座に思い起こしたであろう。極悪人提婆達多が成仏することが書かれた品だからだ。注（3）の引用文は、実は提婆達多品についての教示の文脈であって、最後「候し」で切れているが、次に示す文章へと続いてゆくのである。

［「候し」から続く］を。天王如來と申す記莂を授らるる品にて候。然れば善男子と申は男此經を信じまひらせて聽聞するならば。提婆達多程の惡人だにも佛になる。まして末代の人はたとひ重罪なりとも多分は十惡をすぎず。まして深く持ㇾ奉る人佛にならざるべきや。［後略］[71]

（「主師親御書」）

賢治にとって提婆が（即ち土神と狐が）救われるのは当然の要請、既定のラインであった。ただ、一人合点の言葉足らずで、「土神が他者から何らかの救済の手を差し伸べられるということは、作品の上からは全く考えられない」[72]（原田ゆりか）という結果になってしまったのではないか。

なお、狐の「笑ったやうになっ」[73]た表情、土神の「泪」[74]についての精確な解釈に到達していない。今後の課題としたい。

〔注〕

（a）那珂『提婆達多』の前半の内容は、この「妻のかたき」に当る。なお『提婆達多』巻末に「私」が「この小説をかくのに」「參

考にした」「諸書」[5]が掲げられており、中に「佛本行集經」[6]の名が見える。

(b) 須田浅一郎は、賢治論の中で中 勘助の「提婆達多」に言及しながら、

大正期の中頃は、前述の「布施太子の入山」に続いて、中勘助の「提婆達多」が刊行されるなど、仏典に依拠したユニークな作品が生れた時代であったが、その中に在っても、十善法語やパーリ語系経典のジャータカを包含する賢治の仏典渉猟の広さは、端倪すべからざるものと云えるのではなかろうか。[9]

この西欧仏教学の波濤は、いま述べた人名中に南条、河口の二先達が加わっていることからもうなづかれるように、わが国にも及んで来たことは当然の成り行きであった。たとえば、先に言及した中勘助の『提婆達多』の読みは、それ以前の〝だいばだった〟を避けて〝でーばだった〟とルビが付されており、文中の人名も悉達多（しっだるた）は〝しっどはーるとは〟、その妃耶輸陀羅（やしゅだら）は〝やしょーどはらー〟などとサンスクリットの発音への接近が試みられているが、これなどもヨーロッパの仏教学の波濤が大正期の日本の知識階級に及んでいた証左の一つと見てよいのではなかろうか。[10]

とのみで、賢治作品との直接的な関連については触れていない。

(c) 那珂は次章でも次のように繰り返して描いている。

☆［前略］たゞこの際提婆達多の唯一の無二の慰藉は耶輸陀羅の心が己に注がれてゐると思はれることであつた。彼の負けた時に彼女は顔を赤めてさしうつむいてゐた。

「姫は私の勝利を願つてゐたのだ」

「姫は私の不運な敗北を悲んでくれたのだ」[15]

これが誤解であったことは、次のように描かれている。

☆　その歡樂の最中にスプラブツドハ王はつと立ちあがつて、白髯をゆるがせながら、この度の欵待に對して懇に謝意を述べたのち、更に言葉をあらためて、この交誼の礎を永久に固めんがために耶輸陀羅を悉達多太子の妃に納れたいと申出した。このことは實はこの三日間の滞在中に既に内談が調つてゐたので今はいはゞ假の披露に過ぎなかつたのである。それ故それは一も二もなく即座に承諾された。耶輸陀羅はさつと頰を染めてさしうつむいた。そこに隠しきれぬ嬉しさが漂ふやうにもみえた。悉達多の顔にも流石に喜の困惑が見えた。提婆達多は二人の顔を見くらべて憤怒と嫉妬に燃えた。彼は思はず佩劍の柄を握りしめた。一同は立ちあがつて盃をあげて一齊に、迦毗羅婆蘇都と拘利の萬歳、首圖馱那王とスプラブツドハ王の萬歳、そして多幸なる花嫁花婿の萬歳を唱へた。提婆達多は過失を裝つて殊更祝盃をとり落して微塵に打碎いた。その時歌女たちは音樂の音にあはせてことほぎの歌をうたひだした。[16]

(d)　平山城児に、「提婆達多(ダイバダツタ)が悉達多と耶輸陀羅を争って姫が悉達多の妻になったことから怨恨の念を生じたということは仏本行集経に記すところである」[41]という指摘があり、猪口弘之に、

［前略］同じ経典［工藤注　「仏本行集経」を指す］の向菩提樹品第三十から菩薩降魔品第三十二にかけて登場する〈商主〉(天魔波旬の長子)の名が、小品〈(峯や谷は)〉末尾（校本全集一一巻二四二頁）にみえることからも、賢治が《仏本行集経》そのものを読んだことが推定される。[42]

という指摘があるから、賢治も「仏本行集経に記すところ」を読んだ可能性はあるが、「仏本行集経」には提婆達多が「まつぴらだ」と思ったというようなこと等々は書かれていない。[43]那珂の創作であろう。（平山城児も、先の引用文に続けて、

［前略］ただ、前篇2章（以下、〈前2〉のように記す）から〈前29〉あたりまでの、耶輸陀羅の華麗な行列の詳密な描写、悉達多と提婆達多の武芸仕合の描写、耶輸陀羅の容姿・人柄の描写、悉達多と耶輸陀羅にからんだ提婆達多の心理描写、耶

輸陀羅と提婆達多との密通、そして、〈前34〉から〈前42〉に至る耶輸陀羅の悩みと自殺という事件そのものまでを含めた部分は作者の創作である。[44]

と指摘している。）だから、賢治はこの特徴を、那珂作『提婆達多』の特徴として読取り、感銘を受けたに違いない。

（e）その意味で、小宮豐隆が、「『提婆達多』のテーマとなつてゐるものは、釋迦に對する提婆の「嫉妬」である」[45]と言っているのは、肯綮に中ってはいるが、限定付きでないのが物足りぬ。

（f）文語詩未定稿「恋」の「下書稿」の第二連、「かしこにひとの四年居て／あるとき口をうちつぐみ／あるとき清くわらひける／そのこと何かねたましき」[56]に「ねたましき」という表現が見えるがこの箇所に施されている手入れ、「そのこと［何かねたましき→③何か口をしき→『なんぞ→㊙』なにか口をしき→いとゞくるほしき］」[57]を見ると、賢治自らが「ねたましき」という表現の不適切さに気付いて修正したことが窺える。これは（賢治の表現しようとしたものは）、三角関係に於ける嫉妬でなくて、思う人との隔絶感であろう。

（g）この会話の場面（の土神の話しかけ方）に関して、山根知子は、

［前略］ここで、私が注目したいのは、このようないのちの神秘に対して、「わからんねえ」と言えるだけの土神の素直な心のあり様である。これほど心ときめく樺の木を前にして、わからないことをそのまま正直にわからないと言える土神の心は、樺の木に対して心開かれた状態にあると言えよう。同時に、ここには神秘を神秘として感じ認めることのできる感性が見られる。この神秘を感じる感性は、土神がものの美しさに触れるとき、例えば植物の色そのものあるいは樺の木の姿そのものの美しさに感動する感性に通じよう。それに対して、狐はどんな問題でも決して「わからない」とか「不思議だ」とかは言わない。樺の木に星の色について問われたときも、大沢正善氏も指摘しているように、色について答えるのではなく、うやむやに星雲の話題に転換して、さも自分は何でもよく知っているかのように知的に話すのである。ここに、狐の心のあり様が、いくら樺の木と親しそうに話そうとも、樺の木に対して心閉ざされた状態であることがわかる。このような状態に

おいては、狐の心は常に満たされず、どこか虚しさを抱えていると言えよう。［後略］(62)

と述べている。そうも言えようが、見方を変えれば、土神は相手のことなどおかまいなしに一方的に自分の考えたことをしゃべっているだけ（そして狐への競争心を掻き立てられ、感情を傍若無人〔ならぬ傍若無樺〕に激発させる）、狐は常に相手の気持を思いやって細心に応対している、とも言える。

(1) 那珂『提婆達多』（大10・5・1　新潮社）。

(2) 『【新】校本宮澤賢治全集／第十六巻(下)　補遺・資料　補遺・伝記資料篇』（01・12・10　筑摩書房）口絵写真の最後の頁。以下同全集を『新校十六(下)　補遺・伝記資料』という風に略記し発行所名を省略する。

(3) 編輯校訂兼發行人・加藤文雅『日蓮聖人御遺文』（書名は奥付に記載なき故、背文字及び扉による。明37・8・28　祖書普及期成會）一二四頁。以下同書を通称に従って『縮遺』と略記する。なお、この引用は、原本からスキャニングによる画像処理を施したものである。以下、同様のものを「㊟」で示す。

(4) 同右、七七七頁。

(5) 以上、（前出）那珂『提婆達多』巻末一頁。

(6) 同右、三頁。

(7) 田中智学監修『普及版　本化聖典大辭林　下巻』（大9・12・1原本発行 未見　昭63・10・12普及版発行 所見　国書刊行会）二四三五～二四三六頁。㊟

(8) 扉に「自明治四十五年一月／至大正十五年十二月／増加」と記されている『帝國圖書館和漢圖書書名目錄　第四編　（シート）』（書名は奥付に記載なき故、巻頭より採った。昭12・3・31　帝國圖書館）一六八六頁に同書名が載っている。賢治滞京中に帝国図書館へ行っていたことを示す書簡は、大正十年六月二十九日付　宮沢イチ宛No.193（『新校十五本文』〔'95・12・25〕二一五頁）及び同七月十三日〔推定〕関徳弥宛No.195（同二一七頁）。

(9) 須田浅一郎「宮沢賢治の仏教（二）」（『賢治研究』57（平4・3・30）三八頁。のち須田浅一郎『宮沢賢治の仏教』（'93・10・30 りん書房発行　星雲社発売）収、三二～三三頁。文字遣の異同あり、引用は前者より）。

(10) 須田浅一郎「宮沢賢治と仏教（三）」（『賢治研究』58（平4・7・15）二～三頁。同右、四八頁。字句の異同あり、引用は前者より）。

(11) （前出）那珂『提婆達多』9頁。以下同書作品本文よりの出典注を付した引用は、注(32)(46)(47)(48)を除き㊀であり、アラビア数字で頁数のみ示す。

(12)『新校九本文』（'95・6・25）二四六頁。以下同書よりの引用は、頁数のみ記す。

(13) 20～21頁。

(14) 二五四頁。

(15) 23頁。

(16) 26頁。

(17) 二五七～二五八頁。

(18) 21～23頁。

(19) 二五〇～二五一頁。

(20) 二五三頁。

(21) 二五五頁。

(22) 27～28頁。

(23) 二五二～二五四頁。

(24) 29頁。

(25) 二五五頁。

(26) 107～109頁。

(27) 127頁。
(28) 二五八頁。
(29) 二四八頁。
(30) 二四七頁。
(31) 二五一頁。
(32) 135頁。
(33) 二四七頁。
(34) 142頁。
(35) 186～187頁。
(36) 8頁。
(37) 23～24頁。
(38) 30頁。
(39) 114～115頁。
(40) 73頁。
(41) 平山城児「中勘助『提婆達多』」(『国文学 解釈と鑑賞』715 第55巻12号〔平2・12・1〕一二五頁)。
(42) 猪口弘之「賢治童話と仏典説話―〈雁の童子〉渉典メモ―」(『國文學―解釈と教材の研究―』第27巻3号〔昭57・2・20〕二八頁)。
(43) 編輯兼發行者・國民文庫刊行會『國譯大藏經 第三十九册(第十帙之三)』(書名は扉による。大6・8・20 國民文庫刊行會)二七一～二八二頁。
(44) (前出) 平山城児「中勘助『提婆達多』」、一二五頁。
(45) 小宮豐隆「中勘助の作品」(中勘助/内田百閒『中勘助/内田百閒集』〈現代日本文學全集75〉〔昭31・6・25 筑摩書房〕三九七頁)。

(46) 123頁。
(47) 以上、101頁。
(48) 以上、104頁。
(49) 田中智学監修『普及版　本化聖典大辞林　中巻』(大9・12・1原本発行 未見　昭63・10・12普及版発行 所見　国書刊行会)「しゅらこんじょーのほーもん」の項、一九五一頁。
(50) 龍谷大學編『佛教大辞彙第一巻』(大3・5・18初版 未見　昭15・10・18三版 所見　冨山房) 三五頁。㊟
(51) 大沢正善「「土神と狐」とその周辺――「修羅」の克服――」(『宮沢賢治研究 Annual』創刊号〔'91・3・31〕一一一～一二五頁)。
(52) 秋枝美保「宮沢賢治「修羅」における表現意識の分裂とその克服――童話「土神と狐」を中心に――」(『比治山女子短期大学紀要』第28号〔平5・3・20〕五五頁)。
(53) 同右、五七頁。
(54) 佐藤泰正・編『宮沢賢治必携』(別冊國文學・NO6〕別冊第6号　'80春季号 (昭55・5・10　學燈社) の「賢治童話事典」の「土神(がみ)と狐」の項 (小沢俊郎執筆)、一二九頁。
(55) 宮沢賢治『宮澤賢治　近代と反近代』('91・9・10印刷〔発行日の記載無し〕洋々社) の「第二章」「5　賢治と神来の恋」、六九～七八頁。宮澤健太郎「『文語詩・未定稿』――鬱蒼たる豊饒」(『国文学　解釈と鑑賞』843　第66巻8号〔平13・8・1〕九四～九六頁)。
(56) 『新校七校異』('96・10・10) 六一一頁。
(57) 同右、六一二頁。
(58) (前出) 秋枝美保「宮沢賢治「修羅」における表現意識の分裂とその克服――童話「土神と狐」を中心に――」、五五～五六頁。なお天沢退二郎文の出典原注は、「天沢退二郎「賢治詩における『修羅』」(「解釈と鑑賞」・昭和57・12。後『《宮沢賢治》鑑』所収)」(六九頁)。頁が書かれていないので補記すれば、初出が三九頁、所収本が一五三頁。
(59) 『新校二本文』('95・7・25) 八七～八八頁。

(60) 以上、二四七頁。
(61) 同右。
(62) 山根知子「「土神と狐」の修羅性——土の意味をめぐって——」(『宮沢賢治研究 Annual』第四号〔'94・3・31〕一七九頁)。
(63) 二五六～二五七頁。
(64) (前出)『新校二本文』二二頁。
(65)『新校十五本文』('95・12・25) 一八〇～一八一頁。
(66) 一八頁。
(67) 三九〇～三九一頁。
(68)『新校四本文』('95・10・25) 三〇〇～三〇一頁。
(69) (前出)『新校十五本文』一八六頁。
(70) 213～214頁。
(71)『縮遺』一二四～一二五頁。(画)
(72) 原田ゆりか「「土神と狐」論「神といふ名」「異色性」をめぐって」(『宮沢賢治』第十一号〔'92・1・20〕二三七頁)。
(73) 二五八・二五九頁。
(74) 二五九頁。

(本学教授)